

### 町民海外研修参加者レポート① (要旨) まさに百聞は一見にしかず

団長 大野 仁平治

国際化時代を迎え、来たるべき21世紀にふさわしい町づくりのステップとして、一行14名と青木教育長、大久保係長でデンマークの福祉施設と、イギリスの都市計画について、2ヶ国を訪問視察いたしました。

まず始めに、デンマークのコペンハーゲン市内にある老人福祉施設を訪れました。デンマークでは子供が20才になると親と別れ各々独立することが風習となっており、親は老後は自分の財産を処分して施設に入るのがほとんどです。今回視察した施設ヴェスターブローは27年前に財団法人として設立され、現在の入居者数は60名、職員が100名でそのうち67名が3交代で1対1の介護方式を採っています。入居者の年齢は主に75才から80才で、施設は医療看護は行っていないので病気のときは医者から往診してもらい、又リハビリは自由であるが、老年であることから社会復帰は認めず、入居者の大部分は施設で死を迎えています。住まいは1人1室で少し狭いという感があったが、自由に使用でき、施設運営は市の方針により、個人負担はなく、食費等必要経費を年金から引かれ、残りは貯金として積み立てられています。視察したこのヴェスターブローの老人福祉施設は高福祉と高齢者の自主生活を確保するための福祉サービスが徹底しており、これがデンマークの重要な政策となっています。

午後からはコペンハーゲン市の近郊にあるギールスコフ障害者教育機関を視察しました。ここは障害を持つ青少年の社会進出を援助する学校で、障害児童6才から18才迄の119人が入学しており、児童の個人負担はなく、国、県から障害者に合わせた税が支出され、中でも費用のかかる障害者には特別の予算も支出されています。児童は18才迄はここに居ることができ、この施設から大学や職場に通うこともできます。又、進路について自活を目指す児童は自分から勉強に出て行き、将来的には自分のアパートで生活する者も居るが、ナーシングホームに行く人が大部分です。中には5年前に卒業した生徒で自分のアパートでヘルパーの世話を受けながら、市から車の支給を受けてコンピューターの仕事をしている人もいますということです。デンマークでは、67才以上で職も無くお金が無くても国から年間200万円位もらえ、年金は60才から支給されている人もいます。障害を持つ人が、一般の人と同じ様な地位が保証されるデンマークの制度は、高福祉、高負担について当然であるという国民性を実感しました。

次にイギリスでは、ロンドン郊外のドックランド地区の都市計画関係施設の視察研修を行いました。この地区はロンドンの西側にあり衰退した港湾の繋船地でした。そこにビルやオフィス不足から1981年に再開発計画が持ち上がり、ヨーロッパで最も高いオフィスビルカナダタワーがその中心に建設され、そしてその周辺の開発が進められているもので、荒地の開発により新都市計画が進み、ビルや住宅不足も解消し、更に雇用促進の効果が期待されています。この計画は2000年を目標とした雄大な計画であり、90年代には全体像が明確になってくるということです。企業については10年間の税金を免除する方策もとられており、運営については民間主体ではなく政府が招集して作るようであり、資金は国から出ています。この開発主体委員会として国会で12名の構成メンバーがあり、利益を得るように義務づけられています。

今回のデンマークとイギリスの研修視察に当たり、国柄や政策、制度の違いは当然のことながら自分の国のカラーが政策として明確化されていたと感じます。

デンマークでは高福祉、高負担の福祉政策。年収500万円に60パーセントの税金、そして日本の6~8倍に匹敵する25パーセントの消費税。老人の孤独な1人暮らしなどを考えると、この福祉政策は北欧ならではの人生観の反映であると深く考えさせられました。

ドックランドの再開発ではヨーロッパ最大の首都として、ロンドン市の8.5倍の面積を約20年の年月をかけ、国際的な企業の誘致や陸海空を網羅した世界最大の開発プロジェクトにより、未来都市へと躍進を続けている新生ヨーロッパを目指す都市計画は、想像を絶するものがありました。まさに百聞は一見にしかずであり、貴重な体験を肌で感じた研修でした。

コペンハーゲンの障害者教育機関は寝たきり老人ゼロ主義の立場で通常の生活をするための教育を行っており、パソコンを利用していることには驚き、音楽を媒体としていることに感動した。

小林郁恵さん  
(研修事項全般)



田邊敏夫さん  
(都市計画関係施設)

ロンドン郊外にはイギリス王立植物園が1986ヘクタールあり、地上で花を咲かせる植物の10分の1がある。黒崎は都市公園が県平均以下(3㎡/人)であるので、今後の都市計画は都市公園と一体となった整備をする必要があると考える。

デンマークは子が親と一緒に住むという考えがなく、両親の世話は国がするという考え方。障害者教育機関の先生が「働けなくなった時は国が面倒を見てくれます」と言ったことに国の信頼感を感じた。

中川春美さん  
(福祉関係施設)



デンマークのギールスコフ障害者教育機関にて

ロンドンの再開発は、ロンドンショック(バブル経済崩壊)が起こらない一環として進められたが、どうも副都心的なイメージがある。今回の研修では、旅行社の不手際で中味に触れずに終わったことを残念に思う。

岩野弘昌さん  
(都市計画関係施設)



高橋 繁さん  
(研修事項全般)

デンマークで学んだことは、福祉国家にも関わらず貧富の差が少なく、女性の就業率が非常に高い(80%)ということ。自転車に乗っている方が多いということは公害についても考えていると感じた。

コペンハーゲンの老人ホームは職員が充実していて、かゆいところに手が届き、障害者教育機関では日本とは規模が違い、本当に困ったときに安心してきる環境だなと感じた。

平井成美さん  
(福祉関係施設)



笹川英雄さん  
(研修事項全般)

ロンドンの再開発は狭いところでは何もできない、住宅を含め一気に開発しようという発想で始まったと思う。黒崎もスポーツ公園、都市計画道路を農村部に再開発すべき。

ロンドンの再開発ではレンガ作りの壁や船着場などが残されている。歴史を忘れないように、景観そのものを国民の財産としている。日本ではとても考えられない。

武田 健さん  
(都市計画関係施設)



斉藤ナヲ子さん  
(福祉関係施設)

デンマークの福祉施設で驚いたことは無料で入居できること、個人の意志を細部まで尊重することです。このように福祉に対し真剣に考える機会を与えてもらって感謝しています。

## 第2回 町民海外研修報告会

「これからの町づくりに行政側だけでなく、市民の皆さんも行う必要がありそうです。町では、これから町づくりに取り組む市民のみなさん、国際的な視野を身につけていただき、よりよきまちづくりの一員として行政に参加していただくこと、町民海外研修を実施していきます。」  
第2回目の今回の主要研修目的は、「福祉問題」と「都市計画」でした。12月5日に研修の報告会が行われたので、参加者のかたの報告をここで紹介いたします。  
※ 紙面の都合で要旨のみ、( )内は発表事項



大野仁平治さん  
(研修事項全般)

デンマークの障害者施設を卒業した人で自分のアパートでヘルパーの世話になりながら、市から車を貰ってコンピューターの仕事をしている話を聞き、努力によって自活の道を開かれることもあると感じた。



渡辺 寛さん  
(都市計画関係施設)

ロンドン市内は日本と同様の狭い道路で非常に交通量が激しいなか、道路の拡張工事が一ヶ所もされていない。建物を壊して道路の拡張をしないのは国民性と政府の方針であるということに感銘した。

デンマークの老人ホームの寝たきりが少ないのはスタッフの充実からと感じた。また、社会福祉が充実しているので貯金は自分たちの楽しみのためにするという生活感の違いを感じた。

関本正子さん  
(福祉関係施設)



デンマークは病院や学校、保育所がすべて無料であるが税金が非常に高い。日本も所得税、消費税、社会保険すべて合わせると同じように高いと感じた。

田辺 郁さん  
(福祉関係施設)



駒形宏子さん  
(研修事項全般)

コペンハーゲンの施設では生まれて住み慣れた町で通常の生活が送れるという基本理念が貫かれている。また、健康者、障害者という区別がなく一人一人が人間であるという考えが生きていると思った。